



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市における野生動物問題の環境社会学的解決に向けて：札幌市郊外のヒグマ出没問題における住民参加を事例に
Author(s)	伊藤, 泰幹
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第16979号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16979
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99823
Type	doctoral thesis
File Information	Taiki_Ito_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 伊 藤 泰 幹

学位論文題名

都市における野生動物問題の環境社会学的解決に向けて
—札幌市郊外のヒグマ出没問題における住民参加を事例に—

本論文は、都市における野生動物問題、とりわけ札幌市のヒグマの出没問題について環境社会学的な観点から多角的に分析し、その解決へ向けた方策を、とくに住民の「参加」の問題を中心に論じたものである。

まず第1章では、ヒグマの出没とは何かを確認したうえで、環境社会学分野における「獣害」を取り扱った先行研究を概観し、クマ類の出没問題における「心理的な負担」や、ステークホルダーが広範な都市特有の問題はあまり検討されてこなかったことを指摘した。また、ヒグマの管理において、これまで議論されてきた対策への「参加」は「労働力としての参加」、「知識を得る参加」、「意思決定への参加」に大別できることを確認した。そのうえで、対策の実施が求められている住民（担うべき有志）に着目する必要性を述べ、クマ類が生息する山林と市街地の間の「緩衝帯」で活動・居住する人びとの視点から、ヒグマの出没によって生じる「問題」とは何かという点や、その解決のためにどのような住民・市民参加が望ましいかを明らかにすることを目的とした。本論文の分析の枠組みは、①ヒグマの出没問題を「やっかいな問題」から考えること、②対象者の「ナラティブ」に着目し、そこで語られる「物語」に着目すること、③「アクションリサーチ」として調査者自身が研究対象者と共同で問題解決を考えることとした。また、調査方法として、家庭菜園耕作者（3章・4章）に対しては長期にわたる参与観察やインタビュー調査、さらにはアンケート調査を組み合わせ実施した。また、果樹伐採ボランティア参加者（5章）に対しては参与観察とインタビュー調査を行い、山林に隣接し、ヒグマが出没する住宅街に居住する住民（6章）に対しては、町内会と協働で住民参加型のワークショップを企画し、そのワークショップへの参与観察と実施前後における町内会の動向に対するインタビュー調査を行った。

続く第2章では、文献調査からこれまでの北海道におけるヒグマ管理の経緯を見たうえで、札幌市におけるヒグマの出没問題とそれに対する対応を概観してきた。北海道においては、農作物の被害や人身被害といったあつれきが発生していた。また、心理的な負担も大きな問題となっていた。ヒグマによるあつれきの高まりに応じて、北海道ではヒグマに対する政策が変遷してきた。次に、本論文の調査対象地である札幌市におけるヒグマの出没問題の経緯と、その管理方針、市民の参加状況を概観した。札幌市では、2000年代の前半に西区西野地区で市街地出没が発生する。それに応じて、市民団体がシンポジウムや勉強会、草刈り活動を行うなどの市民参加型の活動が実施された。その後、2010年代前半には藻岩山周辺や豊平川の河畔林を伝って侵入した個体によって市街地出没が繰り返し発生するようになる。このころから、札幌市はヒグマ対応に特化した担当者の設置や管理計画の策定などヒグマの出没に対する体制整備を進めてきた。また、ヒグマの研究者と地域住民が協働した河畔林の草刈り活動が開始されるなど、市街地出没を契機に、市民参加型の活動も展開していた。2020年代も市街地内部への出没が深刻化する中で、管理計画の改定に合わせて、ゾーニング管理の区分を見直したほか、藻岩山・三角山周辺に「ヒグマ対策重点エリア」を設けて、個体数のモニタリングや低密度化を実施する方針を採った。また、相次ぐ出没を受けて、出没している地域の住民による草刈り活動のほか、市民団体による放棄果樹の伐採、草刈りなどが様々な場所・主体によって実施されていることが明らかになった。

第3章では、家庭菜園を営む耕作者を対象として、ヒグマの出没はどう耕作者に理解され、「問題」に発展してしまうかを明らかにした。家庭菜園では、ヒグマの農作物被害の発生頻度は低く、エゾシカや中型哺乳類による作物の食害が深刻であった。そのため、多くの耕作者にとって、ヒグマに

よる農作物被害は、問題と捉えられていなかった。しかし、ヒグマとの遭遇に対する不安は多くの耕作者が抱えており、「心理的な負担」が生じていた。こうした不安は、普段は顕在化しておらず、「まさか、出ないと思うけど」という語りに代表されるように、自らがヒグマと遭遇することに対して他人事のように扱われていた。また、耕作者たちがヒグマの出没を語る際には、ヒグマが出没する理由であったり、ヒグマの行動や生態に対して様々な「物語的説明」を伴って語られていることが分かった。それは、時に「不安」に代表されるような、とらえどころのない「問題」として語られる。また、行政の実施している施策であったり、主体間の意見の相違と照らし合わされることによって、具体的に不満を抱く相手が存在する「問題」として立ちあらわれていた。そのため、ヒグマの出没によって生じる「問題」は、ひとつの確固たるものとして存在しているのではなく、個別的・具体的に、その場の社会的な背景や個人の自然との関わり合いによって生まれるものであった。つまり、ヒグマの出没によって生じる解決すべき「問題」とは、「ナラティブ」によって生み出される多様な困りごとや意見の齟齬という形で存在していた。こうした「ナラティブ」には、マスメディアによってもたらされる情報の一部も断片化されて、自身の経験を補強する形で組み込まれていた。耕作者がヒグマの出没に対して生み出す「ナラティブ」は、個別的・具体的なものであるが、行政が実施しているヒグマの管理は、「セオリー」として一般的・普遍的なヒグマの出没による「問題」を解決しようとする。すると耕作者たちの個別的・具体的な「不安」であったり、困りごとと食い違ってしまい、耕作者たちは行政に対する不満を抱き、それ自体が「問題」となってしまうことが示唆された。

第4章では、引き続き家庭菜園耕作者を対象とし、耕作者がヒグマの誘引対策や獣害対策をどう認識しているかを明らかにし、住民・市民が主体的に対策を進めていくために重要な考え方を提示した。まず、電気柵の貸出し制度利用者への聞き取り調査から明らかになったことは、効果を認識していても耕作者は、電気柵の購入にまで至るとは限らないこと、その理由としては金銭的なコストや労力が語られるが、実際には高齢化でいつまで耕作を続けるかわからないことなどの社会的な背景から電気柵導入が断念されていることを明らかにした。そのうえでヒグマの誘引防止としての電気柵は、行政からその導入が求められているものであり、耕作者の主体性を喚起できていない可能性があることを指摘した。そこで、耕作者が主体的に実施している獣害対策を観察や聞き取りから明らかにした。耕作者たちが自主的に行う被害対策は、エゾシカやアライグマなどの作物の食害を契機に実施されており、作物栽培を縮小させる方向性も含みつつも、なるべく費用をかけず、思いついた対策を試してみるという試行錯誤を含んだプロセスが存在していた。こうした、試行錯誤のプロセス自体が楽しみとなっている様子も観察された。さらに、音やセンサーなど科学的には効果が薄いとされる感覚特性の応用を目指した対策は、金銭的にも比較的入手しやすい金額で、ホームセンター等で多様な種類が販売されていることが明らかになった。そのうえで、耕作者が主体的に行う多様な獣害対策とヒグマの市街地出没を防ぐための対策を両立するためにはどうすればいいのかを、ヒグマの出没調査時の札幌市職員と耕作者のコミュニケーションや、市民調査としてのヒグマモニタリングの事例から検討してきた。その結果、耕作者たちの「小さな技術」を重ねつつ、効果がある対策を伝えながら、現場の人びとが受容可能でその場で生み出される「成解」を探るコミュニケーションを実施することが望ましいこと、耕作者の「ナラティブ」に寄りそいつつ、ヒグマの出没を未然に防止するための「目標志向」型の支援が必要であることが明らかになった。

第5章では、放棄果樹伐採ボランティア（クマボラ）を対象として、活動が継続してきた要因を、参加者の動機と主催者の運営という観点から論じた。クマボラは、「市街地へのヒグマの侵入を抑制する」という目標のもと、2020年から手入れがされていない果樹（放棄果樹）を伐採する活動を行っている。そうした取り組みは、行政・ヒグマの専門家を擁するNPO法人・環境ボランティア団体の三者が役割分担をしながら実施している。加えて、ボランティア参加者は多様な参加動機を持ちつつも伐倒や枝条処理を分担しながら「無理しないで」実施している。主催者としては、ヒグマの市街地・住宅の付近への出没を抑制するために誘引物となっている放棄果樹を除去するという目的の下で実施をしている。この社会的意義に対しても、ある参加者は住民の安全を守るという意味付けで、別の参加者はヒグマが駆除されないようにするという意味付けを持ちながら参加している。さらに、こうした現場自体を見てみたい、出没の背景を学びたいという目的で参加している参加者もいる。その一方で、「暇つぶし」と語る参加者がいるように体を動かす目的であったり、伐採後の材を入手したいという目的で集う参加者もいる。このように参加者は多様な動機の下で集まっていることが分かった。さらに、作業目的が定まっているため、多様な参加動機が後景化されているこ

とが、動機自体のすれ違いや齟齬を生み出しにくくなっていた。また、主催者側では、ボランティア参加者を率いる環境ボランティア団体と札幌市の間に、ヒグマの専門家を擁する NPO 法人が入り、円滑に活動を実施していることが明らかになった。ボランティアでは、参加者同士がヒグマの出没問題の複雑性や自身の考えを休憩時間の雑談などで話しあっている姿が観察された。果樹伐採は、「労働としての参加」であり、多様な目的を有する参加者が参加するきっかけになりうる。そうした場を順応的に継続していくことで、ヒグマの出没に対する「公論形成の場」としての機能が生み出されていく可能性も見いだされた。

第 6 章では、山林と隣接する円山西町町内会でのリスク・コミュニケーション活動を通して、誘引物の対策だけでは出没が抑止できない地域における住民の主体的な対策を検討してきた。山林に隣接する住宅地では、誘引物管理をしても、隣接する山林に定着している個体が、緑地を伝って市街地に出没してしまう可能性がある。そのような地域において、ヒグマの出没しやすい場所や自身が守りたい場所を可視化するために住民目線での、地図を用いたワークショップを行った。ワークショップの結果、住民は、住宅地内部へのヒグマの出没に対して、不安を抱いていた。こうした不安は、出没時の自身の行動や、感情などを個別・具体的な物語を伴って理解されていた。また参加者は、地域内でヒグマが出没した地点を「点」として理解していた。ワークショップでは、ヒグマの出没要因や経路を探る「クマ目線ワーク」と住民が守りたい場所を可視化する「人目線ワーク」の 2 つのワークを実施した。「クマ目線ワーク」では、出没経路や誘引物がありそうな場所を可視化していくことを通して、ヒグマの出没に対する理解を出没した「点」から生息地から侵入する経路などへの「面」的な理解へ促していた。また、ワークを通して身近な自然への価値観の共有や、誘引物除去に対する対策への選好性、個別のヒグマ出没事例のその後に対する情報などが共有されていた。こうしたワークの場では、住民同士の価値観が共有されただけでなく、専門家と住民間の価値観の共有も図られていた。また、ワークをきっかけとして、町内会で新たなつながりができ、次々に対策が展開していく様子も見られた。このように、「地図を用いたワークショップ」は、とらえどころのない心理的な負担を人びとに与えうる「ヒグマの出没」に対して具体的な行動を生み出すためのきっかけとなっていた。具体化していく過程では、その場で生み出され、現場の人びとにとって受容可能な「成解」を生み出しやすくなる。その一つの例として、一連のリスク・コミュニケーション活動から、地図を用いたワークショップが異なる主体間をつなぐバウンダリーオブジェクトとして機能していることが明らかになった。

第 7 章では、これまでの議論の総合考察として、ヒグマの出没「問題」のありようを論じたうえで、参加が求められている住民・市民自身のヒグマとの関わり合いの多様性や、「正しい知識」を普及することによる問題解決の困難さを指摘した。そのうえで、「ともに汗を流しながら」その場その場で受容可能な「成解」を生み出していくことこそが、ヒグマの出没対策への人びとの望ましい「参加」のありようであると結論付けた。そうした「参加」を進めるためには、多様な「ナラティブ」に寄りそうこと、小さなスケールから考えること、具体的なモノ・コトから考えること、意思決定を担う主体も一緒に参加することを述べた。

第 8 章ではこれまでの議論を振り返るとともに、今後の検討課題を提示し、まとめとした。